

『家』のお俊事件

—— 近親相姦意識の危機に象徴されるもの ——

趙 昕

島崎藤村の『家』下巻三章に、妻お雪留守のある晩、小泉三吉（モデルは藤村自身）が散歩に出た雑木林の中で姪お俊（モデルは藤村の長兄秀雄の長女いさ）の手を握ったいわば「お俊」事件は、約七年後の『新生』の発表によりその重みがにわかに増大した。自伝的という藤村文学のジャンルが、研究者をして「お俊」事件と、『新生』に岸本（藤村）が姪の節子（藤村の次兄広助の次女こま子）を妊娠させたという「新生」事件とを、それぞれの作品構想も含めて同一の次元に置いて発展的に解説せしめるのが大きな理由であろうが、その結果、モデルや事実関係に於ける程度、性質の違いは別として、作者の意図と文学的形象に対する解釈に於いて、三吉イコール岸本、お俊イコール節子、すなわち「お俊」事件は「新生」事件の前奏曲であり、「新生」事件は「お俊」事件の必然的結果であるとの見方は、一部の研究者に定着するようになったのである。

「嵐は到頭やって来た。」——「新生」第十五の冒頭の一句である。節子から身の異常を告げられて、岸本は激しい懊悩につきおとされる——この間の筆は、読者にとってあまり唐突と思われるだろうが、前章にも云ったごとく、「家」をふりかえってはじめて納得出来る。妻お雪の旅の留守に、三吉がふと姪のお俊の手にふれるところがある。三人の子供達が眠る墓場を近くのにぞみながら、「不思議な力は、不図、姪の手を執らせた。それを彼は奈何することも出来なかった。」——悲劇はこのときに胚胎しているのだ。岸本と節子の関係は、この作品だけをよむと、いかにも唐突であるけれど、藤村は周到な用意をそれ以前の作品で示しているのだ。自分の生涯の一步一步を注意深く掘りさげ、これを一の体系に組みたてて行

くのは藤村の一貫せる態度である（下略）⁽¹⁾

『新生』を論ずるのが本稿の趣旨ではないため踏み込んだ言及は省く。だが、『家』に於ける「お俊」事件の意味と位置解明につれて、その『新生』との関連性のありようが明らかになるだろうことを望みたい。また、藤村文学の解釈に於いても彼の実人生を考察するうえでも作品を系列的に見るのが一般的方法であるため、本稿でも『新生』はもちろん、藤村の他の作品も併読して『家』分析に寄与させたいと思う。

『新生』を読んで気付くことの一つは、死別した妻や子供たちがたびたび岸本の回想の中に入り込むのに対し、『家』のお俊にあたる実人物が、愛子という名で再び作品に登場してはいるものの、『家』の「お俊」事件を想起させる個所が一字たりとも見当たらないということである。こういった扱い上の違いはこれまでにほとんど気付かれていないようだが、しかし両作品を見比べようとするならば恐らく絶対に見逃してはならないものだろうと思う。『家』のほぼ終結のところに、「父さん、私を信じて下さい……ネ……私を信じて下さるでしょう」と、「夫の腕に顔を埋めて、終には忍び泣出した」お雪を、三吉が「黙って、嬉しく悲しく妻の啜泣を受けた」（下巻十章）との叙述がある。これは三吉つまり藤村が、夫婦間の長い相互不信と没理解の時期を経てようやく心の中に妻を受け入れようとの思いを持ち始めたことを暗示している。結局その思いが甲斐もなく妻に死なれたのであるが、しかし他界に行った妻に喜ばせるだろうものを、藤村は後に『新生』をもってその妻にも読者にも捧げたのである。

「父さん、私を信じて下さい……私を信じて下さい……」

そう言って、園子（『家』の中のお雪—筆者）が彼の腕に顔を埋めて泣いた時の声は、まだ彼の耳の底にありありと残っていた。

岸本はその妻の一言を聞くまでに十二年も掛った。園子は豊かな家に生れた娘のようでもなく、艱難にもよく耐えられ、働くことも好きで、夫を幸福にするかずかずの好い性質を有っていたが、しかし激しい嫉妬を夫に味わせるような極く不用意なものを一緒にあって岸本の許へ嫁いて来た。

自分はあまりに妻を見つめ過ぎた、とそう岸本が心づいた時は既に遅かった。彼は十二年もかかって、漸く自分の妻とほんとうに心の顔を合わせる事が出来たように思った。そしてその一言を聞いたと思った頃は、園子はもう亡くなってしまった。(第一部八)

園子はその頃から夫の書斎を恐れなかった。画家のアトリエというよりは寧ろ科学者の実験室のように冷たく厳肅なものとして置いた書斎の中に、そうして忸々しくいられることを彼女は夢のようにすら楽しく思うらしかった。岸本が彼女に忸々しく仕向けたことは、必とその同じ仕向けでもって、彼女はそれを夫に酬いた。時には彼女は夫の身体を自分の背中に乗せて、そこにある書架の前あたりをヨロヨロしながら歩き廻ったのも岸本の現に眼前に見るその同じ部屋の内だ。長いこと妻を導こう導こうとのみ焦心した彼は、その頃に成って、初めて何が園子の心を悦ばせるかを知った。彼は自分の妻もまた、下手に礼儀深く尊敬されるよりは、荒く抱愛されることを願う女の一人であることを知った。(同十四)

妻への追憶が描かれていること自体は必ずしも直接に『新生』の基本構想に關係するとは思わない。重要なのはつぎに指摘することである。恐らく『家』に於ける三吉夫婦の關係、とりわけお雪の苦悩と苦痛だらけの結婚生活と、「ひょっとすると今度の御産では、正太さんの後を追うかも知れない」(下巻十章)という彼女自らの死への予言とを讀んでいかに残念な思いを禁じ得なかったろう読者に、藤村は、遅かったとはいえ自らの反省と追悼の意でその解決を示し、一抹の安堵感を与えている。これに対し、『新生』の中心問題が何といっても姪との不倫關係であるにもかかわらず、もし『家』の「お俊」事件が果たして『新生』の伏線であったとするならば、「新生」事件の必然性、言い換えれば『家』の「お俊」事件が、当時こそ未発に終わったとはいえ藤村の資質からいえばそれが必ず「新生」事件へと發展してゆくことを証明するためにも、藤村にとって『家』の「お俊」事件が何らかの形で再び『新生』に呼び出される必要性が絶対にあったはずである。というように考える場合、藤村にとっての「新生」事件は、近親相姦に限った問題としては少なくとも作品的に見る場合一つの孤立した事件にすぎないことになる。もしこの二つの作品、二つの事

件のあいだに文学的に何かの関連性があるとすれば、それは別のところにある。この関連性についてしばらく論述を控えるが、とりあえず『家』に於ける「お俊」事件の意味を考えることにする。

『家』が何を主題としているかについて未だに定説というものの存在を認めるのは難しい。ただ、「その中で顕著な方向は、『家』の中心点を近代日本の制度としての〈家〉ではなく、より男と女の〈関係性〉や〈家族〉のレベルで考えて行こうとするありかたである。歴史社会学的視点からではなく、作品世界により忠実に眼を注ごうというわけである」という中島国彦氏の指摘は⁽²⁾、『家』研究の方法と傾向の實際を如実に語ったものと見られる。この問題の詳細はともかく、『家』に関して藤村研究者に広く知られる意見の一つを、三好行雄氏の「『家』のためのノート」(『島崎藤村論』所収、至文堂・昭和41年4月)に見ることにしよう。論文の中で氏は、「『家』の主題は、というより、この小説にあらわれる〈家〉の意味は、それを性急に統一しなければふたつの側面がある。ひとつは人間を外部から規制する機構としての家であり、他のひとつはむしろそれと微妙にからみあいながら、人間を内部から破滅させる生理としての家である。前者は運命共同体としての封建大家族の本質にはかならぬが、藤村はそうした共同体の内部に閉鎖的な伝承関係を編んだ家系の宿命を発見したのである。放縦な血の呪いであり、それゆえの人格的頹廢の危機である」と説いている。いわば伝統的な家族制度批判という普遍的価値と、遺伝としての人格的頹廢の危機に見る小泉家と橋本家の特定性ととの二側面からの主題の捉え方であろう。もっとも、ここに用いられる氏の文章的表現と論文そのものを、もし仔細に味わうならば、作品の普遍性を結論的に認めながらも、藤村の主に意図したものが、社会と時代一般ではなく、「閉鎖的な伝承関係を編んだ家系の宿命」、すなわち「放縦な血の呪いであり、それゆえの人格的危機」を描き出すところにあり、それが作品意味の中心あった、とのニュアンスを強く匂わせるような感はしなくもない。こういった遺伝的な性的頹廢をより重く受け取る立場にたってさらに問題点をしぼり、作品中に書かれている遺伝の問題が主として「近親相姦」の形に現れ、それが作者の『家』執筆の最大の動機であり作品理解のポイントであるとの意見が現れるのである。「ともかく、〈お俊〉事件は『家』のやま場の一つであり、長編『家』のモチーフ、少なくともその

主要な一つではあったと思う。とすれば、『家』の主題も、少なくともその主要な一つは、単なる＜生理＞なり＜放縦な血の遺伝＞なりだというよりも、端的に、近親相姦、あるいは近親相姦の衝迫の自覚とそれへの恐怖だった、といってもいいのではないか。あるいは、その自覚をてこした家系の、＜生理＞なり＜遺伝＞なりへの強い関心だった、といってもいい。ともかく、主人公三吉＝藤村が、近親相姦の衝迫を自己の内面に発見したことが、彼をして『家』を書かした、彼が『家』を書かなければならなくなった、直接の、強力なモチーフだったと思う」と、関良一氏はその『家——まぼろしの三部作』（『島崎藤村必携』所収、学燈社・昭和42年7月）に於いて力説している。もちろん氏は、周到な作品分析と藤村の実生活への考証を踏まえたうえで上記の主張を提出したのであるが、それに関する紹介は省略する。

近親相姦は、長い歴史と文化的背景をもった社会現象としてその発生する環境、人間性などについて従来大きなテーマに扱われてきたが、ここで詳しく言及する余地はない。ただ、その発生理由の一つが人間の孤立した環境にあるとの認識が一般にもたれていると見られる。これについて、渋谷龍彦氏は、「少なくとも現在の日本では、統計的にみて、近親相姦のもっとも多く発生するのは貧しい農山村地帯らしい」（『近親相姦、鏡のなかの千年王国』、「現代思想」1978年5月臨時増刊号）と紹介している。藤村のふるさとほまさに貧しい農山村地帯の木曽の山の奥にあり、その一族が数百年のあいだにごく限られた地理的範囲内に生き繁っていたことを考えると⁽³⁾、その家系には、親戚同士の結婚はもちろん、近親相姦が多発していたことも十分想像できる。『新生』の民助（藤村の長兄）が打ち明けた父と「同族の間に起って来た出来事」（第二部百三十四）はその一例であろう⁽⁴⁾。もっとも明治維新後、木曽馬籠に於ける島崎家の世襲的な社会と経済的地位が崩壊し、藤村兄弟たちが次々と都市に生活の場を移して家族構成や家庭環境が大きく変わったため、近親相姦発生の可能性が現実的に著しく制約されるようになったはずである。しかしそれは絶対に不可能ではない。性と愛の意識が人間本能によるものという基本条件のうえ、狭くて孤立した家庭環境、男女が日頃緊密に接触して生活するなどの諸要素が加われば、性と愛の人間本能が異性の親戚血縁者にも及び、あるいは及び合うことは可能であろう。藤村の三兄友弥が少年と青年時代に流浪生活を送ってい

るうちに女と性的関係に至ったのは、いうまでもなく彼の性の欲望によるとの一面があったが、性病に煩い廃人同様になって家を出ることすらできない状況になると、毎日同じ屋根の下で起居する若いときの兄嫁に性的衝動を引き起こすことになる⁽⁵⁾。そこには、彼を取り巻く環境の変化が、彼の性の欲望を近親相姦の方へと引きずっていくことが伺える。『新生』に於ける岸本と節子とのあいだの出来事も同じような理由から起きたものといえよう。「もし彼がもっと世にいう愛を信ずることが出来たなら、子供を控えての独身というような不自由な思いもしなかったであろう。親戚や友人の助言にも素直に耳を傾けて、後妻を迎える気にも成ったろう。信の無い心——それが彼の堕ちて行った深い深い深淵であった」(第一部百二十七)という岸本の悔恨は、姪との背徳関係の直接な理由がどこにあるかを証明している。このような家庭環境とその環境によって生じる心の動揺が、『家』の三吉にも書かれている。妻が留守で、毎日若い姪二人だけを相手にして暮らし、そのうちのお俊がすっかり少女となり、彼女たちのふだんの生活様態や身の動きまでが否応なしに三吉の目に映るのである。その結果三吉は、

その日から、三吉はなるべく姪を避けようとした。避けようとするほど、余計に巻込まれ、蹂躪られて行くような気もした。彼は最早、苦痛なしに姪の眼を見ることが出来なかった。どうかすると、若い女の髪が蒸されるとも、身体が燃えるともつかないような、今まで気のつかなかった、極く極く幽かな臭気が、彼の鼻の先へ匂って来る。それを嗅ぐと、我知らずに罪もないものの方へ引寄せられるような心地がした(下巻三章)

に至ったのである。

三吉の心の動揺が、ある晩、雑木林の中で散歩するときに、「不思議な力は、不図、姪の手を執らせた」(下巻三章)にまで発展し、あるいは他面からいえば、「姪の手を執らせた」ととどまったのであるが、もし上記のような生活環境がそのままつづいたら、結果はどうだったろう。後の「新生」事件が発生し得たことからその危険性を伺うことができよう。もっともその場合、相手はどう対応するかというのも決め手の一つではあるが。

すなわち結局、「好いところへお雪が帰って来てくれた」(同上)ために、三

吉は当面の危機から脱出することができたのである。

しかし問題はむしろ、作品の表現を繰り返して分析したうえで、姪の手を握ったというのは、たとえそれが結論的に近親への性的衝動といえるにしても、果たしてこれを、家系的な血の伝承と三吉の頹廢した性格の必然的な現れとして藤村が捉え、しかも作品の主題にまで浮かび上がらせているかどうかである。確かにさきに触れたように、『新生』には長兄民助が父の不徳な過去を言い聞かせて岸本の悟りを促そうとする一齣がある。しかしそれは、藤村が自分の犯した近親相姦の罪の根源を父、あるいは家系の遺伝に認める証拠であるとは私は思わない。紙幅の関係で詳述できないが、『新生』の序章、さきの第一部百二十七からの引用、そして民助が父の過去を打ち明けるあたりの扱い方を見るだけでもそれは参考に値するだろう。

さて次に、『家』の中の父に関する一節を見よう。

「あれで、阿爺さんは、平素はどんな人でしたかね」

「平素ですか。癪さえ起こらなければ、それは優しい人でしたよ、宗さんが、貴方、子供の時分と来たら、ワヤク（いたずら）なもんで、よく阿爺さんにお灸をすえられました……阿爺さんはもう手がブルブル震えちまって、『これ、誰か来て、早く留めさっせれ』なんて……それほど気の優しい、目下のものにも親切な人でしたよ」

「種々なことを聞いて見たいナア。ああいう気性の阿爺さんですから、女のことなぞはサッパリしていましたらうネ」

「ええ、ええ、サッパリ……でも、癪の起った時なぞは、どうかするとお末が母親さんや私達の方へ逃げて来ましたよ……お末という下婢が家に居ましたあね」

三吉は正太と顔を見合わせた。誰かクスクス笑った。（下巻五章）

この部分について、亀井勝一郎氏は、「旧家に伝わる淫蕩の血、突如として盲目的に起る性欲、藤村が＜不思議な力＞とよんだものは、＜父＞にもあった。＜瘡の起った時＞お末といふ女中が逃げてきたといふ話をお倉が語るとき、三吉と正太は顔を見合わせるのである。ここにも背負ひこんだ＜家＞がある」（『島崎藤村』、新潮社・昭和28年12月）と解している。しかし私にはこのよう

な読みかたはとうていできない。お倉の話と、その話から思い浮かべられる滑稽ともいえる場面からは、たとえば「お俊」事件に於ける三吉の人に言い難い内心の葛藤と、一般に社会的倫理道德を逸した男女間の性的問題に於ける陰湿な精神状態とを、私たちは見いだすのが困難である。そして何よりも、この父に関する記述が「お俊」事件の後に書かれているだけに、もし自分の姪への性的衝動の原因を作品構成的に父に結び付ける意図が作者にあったとすれば、あれほど自分を責めながら苦しむ三吉つまり藤村にとっては、「正太と三吉は顔を見合わせた」という象徴的な書き方や、「誰かクスクス笑った」という一同の受け取りかたとではことが済まなかったはずである。

近親相姦の起きうる理由は、そもそも人間に存在する性と愛の本能と、何かの原因で異性の親戚血縁者が長期的に一緒に生活するという二つの条件が揃ったうえではじめて成立する。この二つの条件は、かつての木曾馬籠の島崎家系にはいずれも絶対に存在するものだったろうが、東京にある小泉兄弟たちの、基本的に独立した、核家族で構成する家々には人間本能というものしか必然的に存在しない。もしそれでも近親相姦が発生した場合、偶然性という素因の作用した面が大きい。三兄友弥は、廃人同様になって家の中に転び込むことがなければ兄嫁に挑んだこともなかったろう。妻が生きつづけていれば、あるいは早い時期に後妻を迎えたならば「新生」事件が起きなかったろうことは、さきの『新生』からの引用を読んだうえでも十分考えられる。『家』の場合、お雪が祖母死去のため北海道の実家に帰るといふ偶発な事件と、それにあわせてお俊が三吉の面倒を見るために彼の家に住み込むということがもしなければ、三吉にあやしい情熱でお俊の手を握るチャンス、いやそのあやしい情熱を引き起こすチャンスすらなかったかも知れない。仮説を立ててみよう。もし『家』と『新生』の場合、同じ「妻不在」という条件のうえしかし面倒を見てくれる相手が姪でなく他人の女性であったらどうだったろう。後の藤村夫人静子が藤村と結婚するまでに長いあいだ藤村の秘書を勤めていたことは、少なくとも一つの参考として忘れてはなるまい。なるほど藤村自らは、「家の生活で結び付けられた人々の、微妙な、陰影の多い、言うに言われぬ深い関係——そういうものが重苦しく彼の胸を圧して来た——叔父姪、従兄妹同志、義理ある姉と弟、義理ある兄と妹……」（下巻三章）と作品中に結論づけている。この一句は、近親相姦を遺伝として重く見ようとする評者にとっていかに貴重な証明材料で

あろうことは、関係論文を見れば簡単にわかる。しかし果たしてこの一句が、遺伝であることの家系に於ける普遍性と必然性を証明する文学的形象と論理性を伴ったものであろうか。

「義理ある姉と弟」は藤村の長兄の妻こま江と三兄友弥、作品では実の妻お倉と宗蔵を、「義理ある兄と妹」は、『家』を見る限りでは、三吉の書生時代の恩人で小泉一家とも関係の深かった家の息子直樹とお俊とを指すと思われる。宗蔵が何かの形で兄嫁に挑んだことは、事実としてさきに紹介したが、作品に於いてそれは、「実が宗蔵を嫌い始めたのは、一度宗蔵が落魄した姿に成って故郷の方へ帰って行った時からであった。その頃は母とお倉とで家の留守をしていた。お倉はまだ若かった」（上巻三章）との一節に暗示されている。しかしそのときの藤村の表現が単に暗示にとどまっているばかりでなく、「多勢兄弟が有ると、必とああいう屑が一人位は出て来る……何処の家にもある」（同上）という実の話が書き込まれているのは、問題の解読に重大な意味をもっていると思われる。この話は実際に藤村の長兄秀雄が言ったものか、それとも藤村が彼にこう言わせたかは問題ではない。要は、藤村がこのような文学的处理を用いた以上、宗蔵の性格と行動が小泉家の血の伝承によるものでなくあくまで彼本人に限ったものであり、社会一般現象の小泉家に於ける現れに過ぎない、というように私たちが理解するのは自然であろう。一方、直樹とお俊のことに關しては、直樹が「君のように香の高い人に遭遇ったことは無い、これから君のことを白い百合の花と言おう」（下巻二章）というような内容の手紙をお俊に寄こしたことが書かれている。しかし直樹は、いかに小泉家との関係が深かったとはいえ血のつながりもなければ親戚関係でさえない。この点は実際に『家』の下巻二章にはっきりと提示されている。この直樹がお俊に自分の愛を打ち明けようと、また二人が恋愛し結婚に至ったにしてもそれが正々堂々のことであり、家族からも社会からも道徳的に批判を受ける理由はない。それだからこそ直樹は愛の示しをお俊に婉曲に拒否されたにもかかわらずなおも「無垢な心で」（下巻三章）お俊たちと遊ぶことができるのである。いや二人とも「無垢な心で」遊ぶことができるというのは正しいだろう（ここでの「無垢な心で」との描写が「義理ある兄と妹」に象徴される意味と致命的に矛盾することは注意を要する）。だとするならば、「義理ある姉と弟、義理ある兄と妹」は、宗蔵の場合、上巻三章の描写上の特徴に照らせばここには唐突感を禁じ得ず、直樹の場

合は、それは完全に近親相姦の問題からはずれたものである。にもかかわらず現に藤村がそれを書き並べたのは、恐らく彼がこの部分を書くときに限って生じた、旧家に於ける近親相姦の必然性を仄めかそうとの苦心が作用したからであろう。しかし文学的扱いとしては失敗といわざるを得ない。厳密的にいえば、このような扱いが結果的にあったことで、近親相姦の必然性を提示するという作者の意図が、たとえそれがあったとしても作品全体の構成のうえにたったものではないことが証明されたのである。

もう一つ注意したい点は、三吉の心の動揺が、数ヶ所に於いて彼の亡くなった三人の娘への追憶に結び付けられて書かれていることである。「死んだ子供の墓の方へは、まだ三吉は行く氣に成らないような心の状態にあった。時々彼は空な懷をひろげて、この世に居ない自分の娘を捜した……彼の虚しい手の中には、何物も抱締めてみるようなものが無かった……朝に晩に傍へ来る娘達が、もし自分の真実の子供ででもあったら……この考えはすこし彼を呆れさせた。死んだお房のかわりに抱くとしては、お俊なぞは大き過ぎたからである」、「お俊を連れて、養鶏所の横手から彼の好きな雑木林の道へ出た。月光を浴びながら、それを楽しんで歩いていると、何処で鳴くともなく幽かな虫の歌が聞えた。その道は、お房やお菊が生きている時分に、よく随いて来て、一緒に花を摘ったり、手を引いたりして歩いたところである。不思議な力は、不図、姪の手を執らせた」(下巻三章)は、その例である。このような扱い方に注意して、たとえば笹淵友一氏のように、「姪の手を執らせた不思議な力の中に亡児の手を引いて歩いた記憶が作用していたことも否定できない」、「三吉は初めから姪に対して欲望を自覚していたわけではなかった。亡児への追憶がなかったら、またお雪が留守でなかったら、その自覚も生まれなかったであろう」(『小説家島崎藤村』、明治書院・平成2年1月)という、血縁者への性の衝動の必然性を三吉にそれほど認めない意見が出されている。もっとも、理由や誘発要因はなんであれ、全く自分の子供に対するような純情ではなく、やはり一種の罪悪感を伴って姪の手を取った以上、結果的にそれが近親に対する性的衝動との一面を藤村が提示しているといえよう。しかし事実関係はとにかく、笹淵氏のような意見があり得たのは、むしろ藤村の表現を、自分の子供たちへの切ない思いが、そこに提供された環境に作用されて自然にお俊へと移ったという立場にたって読解したからで、換言すれば、藤村はこういう角度から作品を読む可能

性を読者に与えたためである。その結果、自分の子供への愛情の存在は、近親相姦意識であることの必然性を大きく破壊し、いや正しくいえば、藤村に近親相姦意識の必然性を示す意図が不成熟なために、子供への追憶と愛情がこの際の描写の中に入り込むことが可能となったのである。これは、さきに指摘した、「義理ある兄と妹」とありながら直樹とお俊とが互いに「無垢な心で」遊ぶとの個所とは、矛盾が見られる描写としてそのあり得た理由を一にしている。

だが、上記の分析は問題の根本的解明にまだそれほど重要ではないだろう。もっとも注意すべきは、お俊が当事者の一方でありながら全く人形が操られるように描かれていることである。具体的にいえば、三吉に手を握られた後の彼女の考えという考えは、彼女自身が主体となって描かれるのではなく、すべて三吉の想像と憶測、不安と恐怖のうちに書かれているという点である。いわゆる「従兄妹同志」は、正太（藤村の実姉の息子高瀬親夫）とお俊とを指すものであるが、これは一体どういうことかは作品を読んでも誰も知る由がない。しかしそれでもお俊が「叔父さんは……正太兄さんをどういう人だと思いなすって」、「私が二十五に成ったら、叔父さんに御話しましょうって言いましたろう。それよ。その一つよ。豊世姉さん（正太の妻——筆者）がこんな話を御聞きなすったら、どんな顔を成さるでしょう……可厭だ、可厭だ……私は一生かかって憎んでも足りない」（下巻二章）と三吉に話すように、彼女は正太の意図を知りそのために彼の人柄に関して評価し、自分の心情を人に訴えることができたのである。一方の三吉とお俊との場合はどうだろう。

あの晩、姪の手を取った後三吉が「こんな風にして歩いちゃ可笑いだろうか」と「串談のように言う」と、お俊は、「何処までも頼りにするという風で、＜叔父さんのことですもの＞と平素の調子で答えた」（下巻三章）。その後もお俊の三吉に対する姿勢が変わらない。変わったのは三吉の「内部」のみである。当然、いかに三吉があやしい性的衝動を抱いても必ずしも相手に感じさせるとは限らない。問題はその前後の描写から読者が近親相姦の特定性を読んで取れるかどうかである。やはり評者におなじみの、「結婚しない以前は、俺もこんなことは無かった」、「彼は、結婚してからの自分が結婚しない前の自分で無いに、呆れた」（同上）との二句について、たとえば「妻によってめざめさせられた彼の性は、その不在によって内攻し、ついにお俊に対して暴発しかける」

(十川信介『島崎藤村』、筑摩書房・昭和55年11月)との意見がある。恐らく藤村がこう書いた以上、この方向で解釈するのもそれ相応の理由があろう。しかし私は三吉のこのような述懐にどうしても腑に落ちないところが大きい。藤村の性や愛への目覚めが彼の少年時代からであることは、『生い立ちの記』や『桜の実の熟する時』を読めばわかる。作品発表の順からいえば、この面に於ける表現は、早くも『若菜集』から、いやさらにその前彼が「文学界」という同人雑誌に載せた習作にすら見ることができる。佐藤輔子⁽⁶⁾という人に対する事実上の初恋が彼にどれほどの悲しみをもたらし彼の人生にどんな影響を与えたかは、その事が『桜の実の熟する時』と『春』の中に大きく取り上げられているだけでなく、『新生』にまで太く尾を引いていることから察せられよう。そして二十二才のときに明治女学校の教師職を辞めて漂泊生活を送っているあいだに⁽⁷⁾彼は一度遊郭に遊んだ経験さえある(『春』三十七章)。たとえその遊郭遊びが精神的な絶望と孤独感のうちに発生した孤立な事件であるにせよ、彼がときどき不特定な女に思いをかけたりその夢を見たりすることは『春』にも『家』にも書いてある。

彼は勝子(モデルは佐藤輔子——筆者)のことを忘れようとして、何時の間にかさまざまの女に思をかけていた。そういう場合は後から後から起って来る。直に最早前の人は忘れて了う。馬鹿らしい彼の眼には、幻のような女の影が映ったり滅えたりしていた。(中略) 暫時岸本は眺めて立っていたが、やがて母親の方へ自分の背中を向けて、

「母親さん、僕の背中を思うさま一つ打って見て下さい」

と笑いながら、前曲みに成って言った。

「こうかい」

と笑って母親は右の手を揚げようとした。急に手の筋が釣って来た。乳癌の治療をしてから、時々母親はこういうことが有る。

「どれ、私が母親さんのかわりに打って進げる」と姉が笑いながら言った。「こう思うさま眼の覚めるようなやつを——」と岸本は姉の方へ背中を向けた。

「どんなに強くても宜う御座んすか」

「ええ、姉さんの力なら——」

姉は白い、細い手を揚げて、力一ぱいに弟の背中をドヤした。（『春』百十一）

「どんな夢を見るよ」と姉が聞いた。

「私の夢ですか」と三吉は顔に苦痛を帯びて、「友達の中には、景色の夢を見るなんて言う人も有りますがね、私は景色なぞを一度も見たことが無い。夢と言えば女が出て来る」

「馬鹿らしい！」と姉は嘲るように。

「いえ、姉さん、私は正直なところを話してるんです。だからこんな葉なぞを貰って飲むんです」

「お前さんの知ってる人かい」

「ところが、それが誰だか解らない（下略）」（『家』上巻二章）

近親相姦が人が結婚しているかした経験があるかと関係がないことは、一番近いところでは藤村の三兄友弥に伺うことができよう。これくらいの知識は藤村がもたなかったはずはない。まして彼の性の目覚めが結婚する前からあったことを彼自らはすでに告白している。にもかかわらず「結婚しない以前は、俺もこんなことは無かった」というような筋の通らない文言を藤村が書き込んだというのは、彼の本意がどこにあったかにせよ、表現としてはやはり問題になる。しかしこの問題を研究者の側から克服し、作品全体（『家』及び他の作品）のうえにたって「お俊」事件の本当の意味を解明するのは不可能ではあるまい。

由緒のある大きな寺院へ行くと、案内の小坊主が古い壁に掛った絵の前へ参詣人を連れて行って、僧侶の一生を説明して聞かせるように、丁度三吉が肉体から起って来る苦痛は、種々な記憶の前へ彼の心を連れて行ってみせた。そして、家を持った年にはこういうことが有った、三年目はああいうことが有った、と平素忘れていたようなことを心の底の方で私語いて聞かせた。それは殊勝気な僧侶の一代記のようなものでは無かった。どれもこれも女のついた心の絵だ。隠したいと思う記憶ばかりだ。三吉は、深く、深く、自分に呆れた。（下巻三章）

「家を持った年にはこういうことが有った」は、妻とその前恋人勉とのこと（上巻五章）、「三年目はああいうことが有った」は三吉とその女性の知人曾根とのこと（同六章）をそれぞれ指すものだろう。いずれも男女関係に絡んだものであるが、ここに三吉が「お俊」事件をきっかけに過去を思い出す、つまりその相互の関連性や一致点が示唆されることで、「お俊」事件の近親相姦の特殊性が自然に薄まってしまうことになる。そこで私たちはさきの指摘を踏まえて「結婚した以後」とか「以前」うんぬんの要素を排除した場合、すなわち結婚する前にも三吉に「女の絵」があったことを考慮に入れると、「どれもこれも女のついた心の絵だ」というところには、「お俊」事件が三吉（藤村）の少年時代から味わってきた性と愛の目覚めやそのための苦悩の連鎖の中の一事件にすぎないことが結果的に証明されることになる。というように考えると、作品のこの部分に結婚後のことだけが取り上げられているというのは、「お俊」事件を含めた結婚後の一連のことを、家をもつ人の宿命と「夫と妻の繋がれて居る意味」（下巻三章）との問題に結び付けたいという藤村の思惑が強く作用していたからと思われてくる。この問題は、実は『家』執筆の動機に深くかわるものと見られるが、本稿の論ずるところではないため触れないことにする。

しかしそれにしても、私たちはもし、少年時代の漠然とした性の目覚め、恋愛、結婚と夫婦関係、近親への心の動揺、こういったさまざまなものを「どれもこれも女のついた心の絵だ」との一点に収斂すれば、そこにある共通点を見いだすのは難しくない。『桜の実の熟する時』や『春』の中に、岸本は教え子勝子への恋に陥りながら教師の立場を考えてその愛を自分の内面に隠し通そうとして悲しむ。『家』上巻に、結婚して間もなく妻が以前の恋人と手紙を交わしていることを発覚して妻への不信と嫉妬心とで苦しむ。そして今度は相手が姪であるだけに、良心の呵責と倫理的罪悪感に怯えるために自らの「心の戦慄」を感じるのである。事件の様態や性質などが異なるとはいえ、性と愛という人間本能と、自他からくるその本能への抑圧との板挟みの中に生じる人間内面の葛藤、生の不安のうえに、それぞれの事件が互いにつながっているのは明らかである。

このような位置に設定されると思われる「お俊」事件であるため、描写に於いては三吉がお俊に変わって彼女の心理活動までを語り、それはまた三吉自身の内面の不安と恐怖とに結び付けられて表現されることが可能だったのである。

彼は、「実に、自分は馬鹿らしい性質だ」とか、「これから叔父さんも、もっとどうかいう人間に成ります」など、姪たちにわけのわからない、笑わせるような、しかし自分としては真剣な言葉を食事のときに言い聞かせ、お俊が断りなしに実家に帰った晩に、彼は「何をお俊が母親に語りつつあるか」、「近づいて見れば、叔父の三吉も、従兄弟の正太とそう大した変りが無い……低い鋭い声で、こう語り聞かせているだろうか」と想像して、次第に「恐怖を抱くように」なる。そのために彼は「暗い、遣瀨ない心」を引き起こしたり、「俊はまた、何を間違えたんだ。俺はそんな積もりじゃ無いんだ」と心の中で自分弁解をしたりする。しかし翌朝帰ってきたお俊には、「別に変った様子も見えなかった」のである。それでもなお、「＜すっかり私は叔父さんの裏面を見ちゃってよ——三吉叔父さんという人はよく解ってよ＞こう骨を刮るような姪の眼の光を、三吉は忘れることが出来なかった」のであり、あげくのはては、彼は「俺は、もう逃げるより他に仕方が無い」という、「狂人じみた声を出すように成った」という（以上下巻三章）。客観的事実としての「お俊」事件は、「不思議な力は、不図、姪の手を執らせた」との一句に尽きるのに対し、その前後の三吉の心理活動描写に藤村がいかにか筆致を惜しまなかったか、上記の引用だけでも十分に説明がつくだろう。

前掲の「現代思想」1978年5月臨時増刊号に、『近親相姦と文学的想像力』という野口武彦氏の論文が載っている。その中に氏は、「近親相姦の禁忌の意識が、侵犯の罪障感、背徳の戦慄、自己制御の緊張などのかたちをとったときに、はじめて発生するのである。禁忌それ自体が意識内部で対象化される、あるいはむしろ、意識閥下に沈潜して深層心理的な複合をかたちづくってこそ、それは文学的想像力の酵母に転化する。無自覚に犯される近親相姦は、たかだか性行為の一変種にすぎない。その禁忌が人間意識に浸潤して後、ようやく近親相姦は精神上の問題になるのである」と述べている。この論文は多く日本古典文学を分析の対象とし、近代文学に関しては『家』ないし『新生』への言及には及ばず、取り上げた泉鏡花と谷崎潤一郎の作品についても論述が簡単にとどまっている。古典文学でも近代文学でも近親相姦の問題が全般にどう表現されているかについて私はほとんど知識もなければ若干あったとしてもここで具体的に考える余裕はもたない。しかし、古典文学が「近親相姦の情念を論ずるこ

とのみが可能であって、心の葛藤は問題にならない」のに対し、近代文学に於いては、「近親相姦それ自体が意識内部で対象化され」、作家が、「自己の存在の問題性を培養基として」、「人間内心の深い葛藤を引き出してくる」という野口氏の論述は、実は古典文学と近代文学の本質の違いを指摘したもので、近親相姦の範ちゅうを越えた文学一般の根本的性格に関する問題提起である。その中には当然、『家』の「お俊」事件理解のポイントが示されている。「お俊」事件は、目に見える事実としてたかだか「不思議な力は、不図、姪の手を執らせた」にすぎないが、三吉の内面の闘いがいかに残酷に書かれたものかは私たちはさきに見た。『新生』に於いても、岸本は、事件から逃れて異国のフランスで三年間「牢獄のよう」な「暗い部屋の内部」（第一部百十二）で自分を見つめつけ、国外出発の際に次兄に真実を打ち明けようと決心しながら神戸で会ったときにも上海に着いたときにもそれが果たせず、節子の母親に対し、「死んで行く人に隠して置くなって……そんな法は無い」（第二部百七）と思いつつも、幾たびの見舞にもかかわらずその母親が死ぬ直前までに彼は告白できなかったのである。ここで瀬沼茂樹氏の『新生』評を想起するのだが、「この苦悩は、事件の破倫性にあるだけではなく、これに処する捨吉（岸本——筆者）の態度、その気質にもとづくものである。＜何故、不徳はある人にとって寧ろひそかなる誇りであって、自分に取って其様な苦悩の種であるのだろう＞（第一部八十六——筆者）」という気質にもとづく執拗な自己呵責と、狐疑逡巡のうちに秘密を隠蔽し暴露を惧れる念との、かもしだす懊悩である」（『島崎藤村——その生涯と作品』、日本図書センター・1984年2月）という氏の評した『新生』の表現上の特徴は、『家』の「お俊」事件の場合とは完全に合致する。もっとも、相手の姪に自然とも思われる「手を握る」ことと、社会的に影響を及ぼす姪を妊娠させることとは、決して同次元のものではない。しかし性の意識や性行為の対象が姪であるが故に恐怖と罪悪感を抱き、またそういうことは決して誰にも打ち明けてはならないがために、すべてを自己の内面に隠して一層の苦痛に堪えねばならないという同一の文学的方法のうえに、「お俊」事件と「新生」事件が成り立っているのである。これもまた『家』と『新生』との両作品の一致するところである。いや、この二つの作品だけではあるまい。『春』や『桜の実の熟する時』の中に、恋愛、家庭、理想、人生針路の選択などに於ける主人公つまり藤村の悩みと悲しみがすべて彼の内面の葛藤の形で処理され、

基本的に虚構の作品である『破戒』でさえ、作品発表当時の論評を引用すれば、「外部からの迫害よりも、主人公が心中の苦しみ、疑心暗鬼を生じての不安の情を写す」⁽⁸⁾し、「個人が内心の根柢を衝いて、目醒め来れる生活の願望と、これを圧抑し毀傷せんとする固陋なる社会の旧思想旧感情との衝突、従っては個人内心の新しく覚めたる知識と、旧きに従って安きを憚まんとする感情との争ひ、そこに生じ来たる惨ましき苦痛、これ等のものを描かんとした」⁽⁹⁾のである。こういった当時の批評は、素朴ではあれ、藤村の意図と作品表現の特徴の根本を掴んだばかりでなく、その後に発表された藤村の他の作品に対しても、現在にまで現実的な意味をもっている。「ああ、自分のようなものでも、どうかして生きたい」（『春』百三十二）という藤村の有名な詠嘆は、彼の「生きる」ことへの執拗な追求の念を凝縮し、と同時に、「吾胸の底のこゝには言ひがたき秘密住めり」（『落梅集・胸より胸に』）には、生きるために必ず不安と苦悶と恐怖の伴うことが語られている。こうして藤村は、理想と現実、情熱と憂鬱、本能と道徳という二律背反のうえに成り立つ人生の問題を、一部に観念的、抽象的なものが免れていないにせよ、自分の「内的世界」への凝視を通して捉え、「自己の存在の問題を培養基として」、「人間内心の深い葛藤を引き出してくる」という近代文学の基本的性格の一側面を自らの作品に保障したのである。この意味上で、「お俊」事件は、近親相姦という特定の問題としてはそれほど認める余地はなく、他の事件なり問題なりとともに、『家』また他の作品に一貫して流れる「人生を見つめる」という藤村文学の基調を支える要素あるいは手段としてその意味と位置が認められるべきである。

〈注〉

- (1) 平野謙『新生論』（『島崎藤村・戦後文芸評論』所収、富山房・昭和54年10月）の中に亀井勝一郎の意見として紹介されたもの。
- (2) 「日本文学研究資料叢書・島崎藤村Ⅱ」の解説『今日の藤村研究、明日の藤村研究』、有精堂・昭和58年6月。
- (3) 筑摩書房「藤村全集・別巻」（昭和46年5月）の島崎氏系図によると、先祖が永禄元年に木曾馬籠に定住して永昌寺を建てて以来、藤村の父正樹までに十七代つづいた。『夜明け前』にもこれを書いている。
- (4) 西丸四方氏の『島崎藤村の秘密』（有信堂・昭和41年7月）によると、藤村の父正樹は異母妹由伎と恋愛関係があった。
- (5) 藤村の三兄友弥は、東京での遊学を途中でやめてある店の奉公人となり、

ある日店の番頭を殴って流浪生活をはじめ女との性関係で性病にかかり故郷の長兄の家に住み込むことになった。そのときに長兄がずっと東京に出ており、友弥はその妻に挑んだことがあるという。『家』上巻三章に書いてある。ただ西丸四方氏の『島崎藤村の秘密』では、友弥は、故郷ではなく、すでに長兄が一家を東京に連れ来て後その家に転び込み、長兄入獄のときに兄嫁に無礼なことをしようとしたという。

- (6) 藤村は明治女学校の教師在任中、教え子の佐藤輔子に恋を覚え、教師である立場を考慮しそれを打ち明けることができず、苦しんだあげく職をやめて関西漂泊に出かけた。『桜の実の熟する時』と『春』に書いてある。
- (7) 同注6。
- (8) 正宗白鳥「『破戒』を評す」。初出「早稲田文学」明治39年5月号、注3「藤村全集・別巻」所収。
- (9) 注1『島崎藤村・戦後文芸評論』所収『破壊論』の引用による。